

話し言葉トルコ語における-r の脱落：多言語話し言葉コーパス(MSC Turkish)の場合¹

川口 裕司

(東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

要 旨

-r の脱落は話し言葉トルコ語の特徴として知られ、ほとんどの記述文法の中で言及される音現象である。しかるに-r 脱落に関する本格的な言語分析は一度も行われたことがなかった。本稿では、多言語話し言葉コーパス（トルコ語）という小さなコーパスの分析を行った。現在形接尾辞の-r の脱落は、先行研究が指摘するように、語末と子音前という2つの音声文脈を考察する必要がある。言語コーパスの分析は、しばしばそれまでに知られていなかった言語事実を提示することがあるが、本分析により、子音前という文脈は、実際のところ/d/, /l/, /m/, /s/の4つの子音の前に限定されていることが分かった。また単語 *bir* における-r 脱落は、*bir şey*, *bir de*, *bir şekil*, *bir yer* といったコロケーションが-r 脱落の頻度に大きく関係していることも判明した。

ではなぜ-r の脱落は起こるのか。性別、年齢、出身地のような社会言語学的要因は統計的にみて関連性がない。会話のトピックや速さのような文体的要因はどうかと言えば、速さが *bir* の場合に関係しているように思われる。全体としては、-r の脱落は個人的に動機づけられた言語変異と考えられる。

1. はじめに

周知のように、コーパス言語学は1990年代から多数の言語において研究されるようになった。今日では、話し言葉を分析する言語学の分野、たとえば社会言語学や語用論においても、言語コーパスは重要な役割を果たすようになってきている。トルコ語学において、-r の脱落はどの記述文法においても言及されているが、筆者の知る限り、話し言葉のコーパスに基づいた分析はなされたことがない。本稿では、まず最初に、多言語話し言葉コーパス（トルコ語）（以下、MSC Turkish と略）のコーパス設計を概観し、続いて話し言葉にお

¹ 本論考は、グローバル COE 「コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE)」によって、2008年5月8日・9日に開催された国際シンポジウム「言語記述と言語教育におけるコーパスと変異」の口頭発表に基づいている。同発表は、ほぼ同一内容で“A Corpus-Driven Analysis of -r Dropping in Spoken Turkish”と題して、*Corpus Analysis and Variation in Linguistics*, Y. Kawaguchi, M. Minegishi, J. Durand, eds., Amsterdam/ Philadelphia, John Benjamins, 2009, pp.281-297 に掲載された。

る-rの脱落について、主にどのような要因が関与することで-rの脱落が促進されるのかを考察する。最初に現在形接尾辞-Iyorについて、次に現在形接尾辞と単語 bir 「一つの、ある」の相関関係について検討する。

2. トルコ話し言葉コーパスと-rの脱落

2.1. MSC Turkish と言語運用に基づく言語情報学

MSC Turkish の構築は、21 世紀 COE 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」において構想された。<http://www.coelang.tufs.ac.jp/index.html> を参照。21 世紀 COE では、自然談話を採取するために研究者と博士課程院生を現地に派遣した。現地では、それぞれの国の大学等の高等教育機関からサポートを受けることができた。フランスではエクス・マルセイユ大学とパリ 13 大学、スペインではマドリード自治大学、マレーシアではマレーシア国民大学、台湾では淡江大学、ロシアではモスクワ人文大学、トルコではマルマラ大学とイスタンブール大学の研究者から協力を得ることができた。トルコ語については、http://www.coelang.tufs.ac.jp/multilingual_corpus/tr/index.php?contents_xml=top&lang=ja を参照。

まず最初に、MSC Turkish の言語データの代表性について議論しておく必要があろう。本稿の中で分析されるイスタンブールの話し言葉トルコ語は、トルコ共和国にみられる現代トルコ語の様々な変種が混合したものであると言えよう。実際、国内の様々な地域の人々がイスタンブールに上京しており、イスタンブールはトルコ語の様々な地域的・社会言語学的変種のるつぼである。その意味で、様々な地域のトルコ人たちの間で相互理解ができるように、この巨大都市では一種の標準的なトルコ語が練り上げられているとも言えよう。しかしイスタンブールのトルコ語が、現代トルコ語の標準的な話し言葉であるとしても、そのことはイスタンブールのトルコ語の中に内部変異が存在することと何ら矛盾しない。

21 世紀 COE プロジェクトにおいて、2005 年 6 月と 2006 年 6 月の 2 度にわたり、マルマラ大学とイスタンブールの言語センターにおいて、合計 27 個の自然談話が録音された。² 転写の問題を考慮して、基本的に会話は 2 名の話し手による対話とした。会話分析では、会話内容にある一定の制限を設けるために、インフォーマントの話す話題を調査者が事前に決めることがあるが、もちろんインフォーマントが自由に話題を設定するほうが自然さがより増すことになる。³ ほとんどの会話において、インフォーマント自身が話題を選んでいるが、若干の例においては、調査者がインフォーマントに事前に特定の話題を話すようお願いした場合もある。録音の総時間は 10 時間 26 分で、総語数は約 93,000 語であった。本コーパスは英語、ドイツ語、フランス語等の話し言葉コーパスに比べるとたいへん小さな規模であるが、現状では話し言葉トルコ語のコーパスに関する限り、本コーパスは大きな部類に属する。表 1 に各会話のプロフィールを挙げておく。

² 21 世紀 COE の終了後、MSC Turkish プロジェクトは、グローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」によって継承された。<http://cblle.tufs.ac.jp/index.php?id=68> を参照。

³ Gibbon, Moore, and Winski (eds). 1998, p.103 を参照。

表 1. 会話と話題

	コーパス	長さ(分)	話題	録音日
1	D101-03-05	28.77	教育と大学	2005.6.23
2	D102	32.36	タバコ	2005.6.23
3	D104	29.26	EU とトルコ	2005.6.23
4	D106	29.52	テレビ	2005.6.23
5	D107	35.42	トルコについて	2005.6.24
6	D108	22.46	余暇	2005.6.24
7	D109	26.25	故郷	2005.6.24
8	D110	29.12	観光地	2005.6.24
9	D111	26.5	休暇	2005.6.24
10	D112	28.18	言語教育とトルコ語	2005.6.24
11	D201	5.40	教育と職業	2006.6.8
12	D202	38.32	トルコ文化	2006.6.21
13	D203	26.53	テスト	2006.6.14
14	D204	26.53	読書	2006.6.14
15	D205	25.14	アメリカ合衆国とトルコ	2006.6.21
16	D206	36.13	学生	2006.6.21
17	D207	18.38	トルコ文学と文化	2006.6.21
18	D208	30.54	外国語とトルコ語	2006.6.21
19	D209	31.32	詩	2006.6.29
20	D210	5.19	余暇	2006.6.29
21	D211	15.28	ドラマ	2006.6.29
22	D212	26.53	音楽	2006.6.29
23	D213	22.20	休暇	2006.6.20
24	D214	5.51	海外旅行	2006.6.8
25	D215	24.13	フランス語	2006.6.8
26	D216	23.55	イスタンブール	2006.6.8
27	D217	5.29	話し言葉	2006.6.8

17名のインフォーマントは、男性が8名、女性9名で、年齢は20歳から55歳まで様々であった。出身地もトルコの様々な地域、たとえばアルダハン、エラズー、イスタンブール、イズミール、カイセリであった。彼らのほとんどが学部学生、大学院生あるいは教員であったことから、インフォーマントは高い教養をもったトルコ人であると言える。

表 2. インフォーマント

		性別	年齢	出身地	職業
1	AHT	M	30	イスタンブール	教員
2	AK	F	32	エラズー	大学院生
3	BG	F	26	イズミール	研究員
4	BH	F	24	イスタンブール	大学院生
5	DH	F	26	ゲブゼ	教員
6	EY	F	23	イスタンブール	学部生
7	FK	F	55	イスタンブール	教員
8	HS	M	29	クルシエヒル	教員
9	MG	M	28	カイセリ	教員
10	MÜ	F	40	ウスパルタ	学部生
11	NS	F	20	イスタンブール	学部生
12	ÖK	M	29	ブルサ	学部生
13	RŞŞ	F	38	ネヴシエヒル	教員
14	SG	M	30	イスタンブール	教員
15	ŞK	M	27	スイヴァス	教員
16	SY	M	36	ヨズガット	教員
17	ÜD	M	30	アルダハン	教員

対話を記述する際の転写方法は Morel et Danon-Boileau (1998: 5) に基づいているが、以下の補足が加えられた⁴。

表 3. 転写における決まり

(?), (!)	質問, 感嘆
-	談話の始まり
#, ##, ###	短い, あるいは長いポーズ
ooo, aaa	感情的に長い母音, 例 yook 「いいや」, haayır 「いいえ」
(.)	ためらい, あるいは中断
(.....)	脱落した分節音
_____	アクセントの置かれた部分
e (eee)	埋め草
m (mmm)	同意
{.....}	遊離部分, 例 hava güzel {bugün} = bugün hava güzel. 「今日は天気がいい」
[.....]	微笑み, 笑い, 咳などの言語付随的要素
<.....>	重なり部分
.....	比較的速く述べられた部分
xxx	理解不可能な部分
%.....%	特別なイントネーションやメロディ

⁴ マルマラ大学のセリム・ユルマズ氏との共同作業による。詳細については Yılmaz (2006) の pp. 202–205 を参照。

2.2. 頻度と語彙

語彙の頻度曲線は図1（上位40項目のみ）のようになる。縦軸に語彙の生起数、横軸には頻度順位がそれぞれ示されている。第1位から第9位まで、曲線はひじょうに急であり、9位から13位までは比較的平坦な頻度に留まるが、13位と14位の間には大きな下降が見られ、その後、生起数は漸進的に減少する。

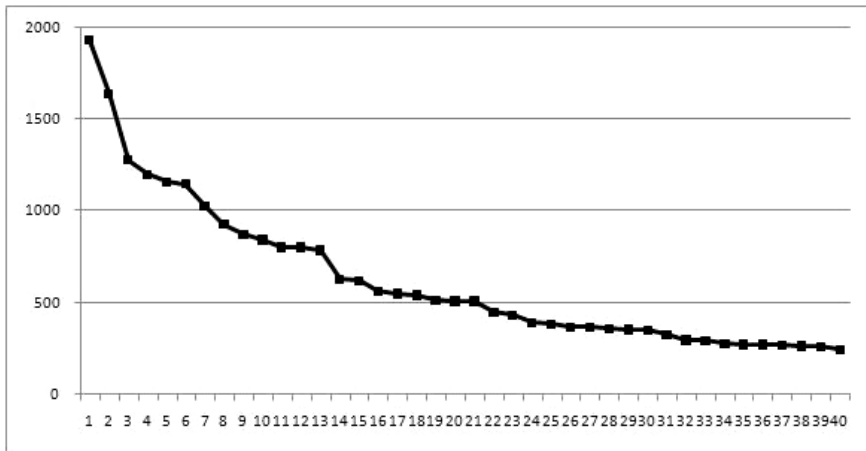


図1. MSC Turkish の語彙の頻度曲線

上位20語は表4のようになる。最も頻度の高いのが語末-rの脱落した *bi(r)* であり、脱落しない単語 *bir* は6位である。この単純な頻度集計から分かるように、-rの脱落は話し言葉トルコ語において、極めて頻度の高い現象であると言える。それゆえコーパスの中で観察される-rの脱落を客観的に分析し、当該コーパスから言えることを確認しておくことは決して無意味なことではない。

表4. 上位20語

順位	単語	生起数
1	<i>bi(r)</i>	1928
2	<i>çok</i>	1639
3	<i>da</i>	1279
4	<i>yani</i>	1199
5	<i>de</i>	1159
6	<i>bir</i>	1147
7	<i>bu</i>	1028
8	<i>o</i>	929
9	<i>ama</i>	875
10	<i>ee</i>	845
11	<i>ben</i>	805
12	<i>evet</i>	804
13	<i>var</i>	789
14	<i>ve</i>	631
15	<i>e</i>	623
16	<i>şey</i>	567
17	<i>eee</i>	552
18	<i>için</i>	543
19	<i>işte</i>	514
20	<i>daha</i>	512

ところで、ほとんどのトルコ語音声学および音韻論の入門書が、-r の脱落の説明にページを割いている。たとえば、『トルコ語の構造－I 音声学』の中で、スムル・ウズソイは子音の脱落という項の中で-r の脱落に言及している。

8.2.2. Ünsüz Düşmeleri 子音の脱落

...

(i) /r/ düşmesi /r/の脱落

Bir sözcüğünün ve {-Iyor} biçimbiriminin son sesi konumunda bulunan /r/ sesi hızlı konuşmada çoğunlukla düşürülmektedir.

単語 *bir* 「1つの、ある」と形態素 {-Iyor} の最終位置にある/r/音は、早い会話において一般に脱落する。

bir → *bi*

geliyor → *geliyo*

{-Iyor} biçimbiriminde görülen /r/ - düşmesi, {-Iyor} ekinden sonra gelen kişi ekinin ikinci tekil ya da ikinci çoğul kişi eki olduğu durumlarda da görülmektedir:

形態素 {-Iyor}において見られる/r/の脱落は、2人称単数あるいは複数の語尾が続くときにも観察される。

geliyorsun → *geliyosun*

geliyorsunuz → *geliyosunuz* (Özsoy, 2004: 109)

/r/の脱落は、トルコ語学で上記の現象として広く認知されており、多くの研究者は、速い口調において -r は最も頻繁に脱落すると主張してきた。この解釈では、速い話し方の影響によって、子音-r が脱落すると主張しているように聞こえる。実際、こうした説明にはある程度の真実味がある。普通ではない速いスピードで話そうとする心理的なプレッシャーから分節音の脱落が起きることは予想される。とは言うものの、-r の脱落は、話し言葉トルコ語ではあまりに卑近な現象であるためか、その説明に疑問を抱くことがなかったように思われる。筆者の知るところでは、-r の脱落現象を具体的に分析した研究は皆無である。本稿の目的は、MSC Turkish コーパスの証拠に基づき、-r の脱落の諸要因を再定義することにほかならない。

3. -Iyor における-r 脱落の諸要因

ウズソイの記述に基づくなら、-r 脱落では2つの文脈を区別できる。1つは現在形接尾辞-Iyor であり、もう1つは単語 *bir* である。まず現在形-Iyor における-r 脱落の諸要因の検討から始めることにしよう。

3.1. スピードと-rの脱落

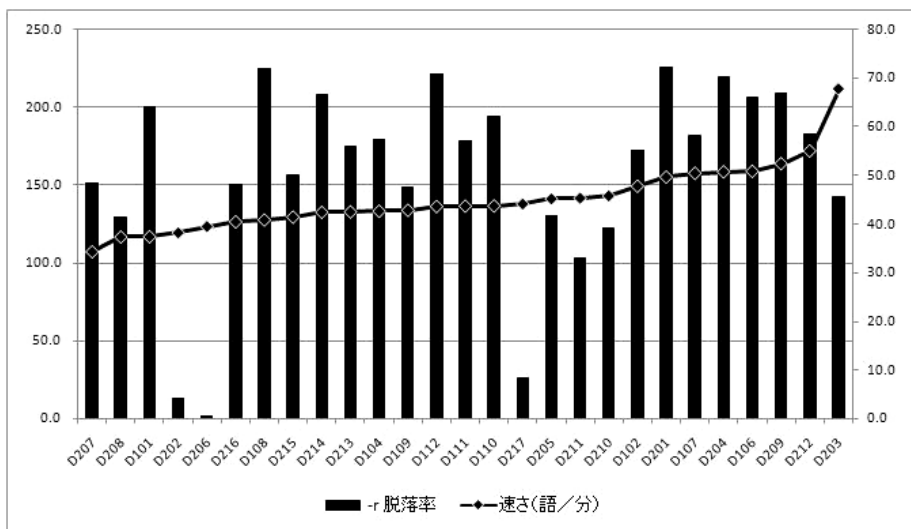


図 2. スピードと-rの脱落

まず速い話し言葉が、現代形接尾辞における-rの脱落を引き出すのかどうか吟味する必要がある。スピードはここでは1分あたりの語数として計算した。図2で棒グラフは-rの脱落を百分率で表したものである。百分率は-Iyo(r)の生起数を、-Iyorと-Iyo(r)の総和で割ったものである。折れ線グラフはそれぞれの会話のスピードを表す。グラフ上のデータはスピード順に並べられていて、左側のD207が最も遅く、右側のD203が最も速い。スピードと-rの脱落率の間には相関関係があるのだろうか。ピアソンの相関係数はたいへん低く、相関係数 $r = 0.25$ ($n = 27$) は統計的に有意ではない ($p = 0.22 > 0.05$)。つまりスピードという要因は、現在形接尾辞-Iyorにおいて、-rの脱落を引き起こす要因になっているとは言えない。

3.2. トピックと-rの脱落

日常会話では、話し手と聞き手は重要度の低いトピックにあまり注意を払わない。直観的に考えれば、そうした注意を怠っていることが分節音の脱落を引き起こすのではないかと思われる。そこでMSC Turkishの様々な会話のトピックを一般的なトピックと特殊なトピックに分けてみた。一般的なトピックとは、学生、テスト、故郷、ドラマ、観光地、イスタンブール、余暇、音楽、タバコ、休暇等であり、特殊なトピックとはトルコ文化、話し言葉、教育、EUとトルコ、トルコ文学である。

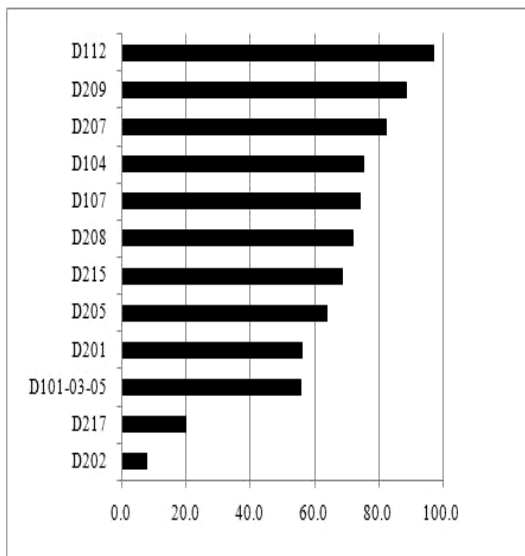
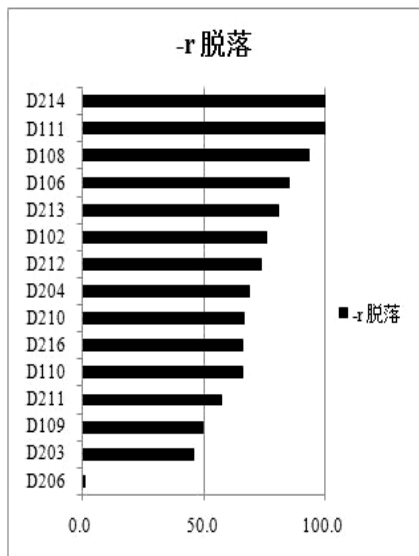


図3. 一般的なトピックにおける-rの脱落 図4. 特殊なトピックにおける-rの脱落

図3と図4から、異なる種類のトピックが-rの脱落に関与していないことが分かる。たとえばD108とD210はいずれも同じ余暇に関する会話である。前者は-rの脱落が93%であるのに、後者は67%である。D112とD201も同じ教育についての会話であるが、-rの脱落率は全く違っている。ここでもピアソンの相関係数はたいへん低く、相関係数 $r = 0.11$ ($n = 27$)は有意ではない($p = 0.60 > 0.05$)。

3.3. 文法的文脈と-rの脱落

コーパス分析によれば、-Iyorの-r脱落は、定過去形、不定過去形、現在形、仮定形の4つの異なる文法的文脈において起きる。-r脱落の比率はこれらの文脈においてほぼ同じである。つまり文法的文脈の違いは-rの脱落には関与的ではない。図5参照。

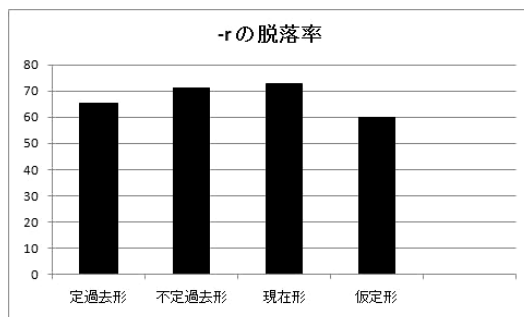


図5. -rの脱落と文法的文脈

表 5. 文法的文脈における-r 脱落の生起数

定過去形	yordu	53	現在形	yor	1310
	yorduk	15		yorsun	279
	yordum	43		yorsunuz	91
	yordun	8		yorlar	225
	yordunuz	3		yorki	1
	yorlardı	9	仮定形	yorsa	23
不定過去形	yorlarmış	10		yorsam	5
	yormuş	32		yorsan	18
	yormuşsun	1		yorsanız	2
	yormuşum	2			

加えて、-r 脱落の現象は主に 3 つの現在形、-yor, -yorsun, -yorlar において起き、それら 3 つの文脈だけで、全生起数の 85% を占めていることは注目に値する。表 5 を参照。

3.4. 音声的文脈と-r の脱落

先行研究によれば、-r 脱落にとって最も影響力のある要因は音声的な要因である。たとえば、ギョクセルとカースレイクは *Turkish: A Comprehensive Grammar* の中で、-r の脱落を次のように記述している。

口語では、接尾辞末の r は、子音で始まる接尾辞が続くとき (*gidiyorsun* 君は行きます [ʤidijosun] / [ʤidijorsun])、(中略) あるいは単語の末尾に現れるとき (*sarıyor* 彼・彼女は巻く [sarijo] / [sarijor])、しばしば発音されない。母音で始まる接尾辞が続くとき r は保持される (*seviyorum* 私は愛する [sevijorum])。 (Göksel and Kerslake, 2005, p.83)

したがって 3 つの文脈を区別することになる。第 1 は、子音が後続するときで、-r の脱落が起きる。第 2 は語末であり、やはり-r の脱落は起きる。そして第 3 として、母音に後続する場合で、-r の脱落は起きない。MSC Turkish によると、それらの音声環境はもっと詳細に記述することができる。

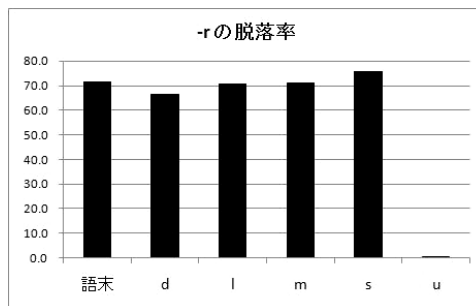


図 6. 音声的文脈における-r の脱落

現在形接尾辞-Iyor に後続する 4 つの子音は、/d/, /l/, /m/, /s/である。-r の脱落率は語末とほぼ同じで、約 70%である。図 6 参照。一般に-r は母音の前では脱落しない。4 件の例外が観察されたが、これらはいずれも転写の際の誤りと考えられる。表 6 参照。

表 6. 音声的文脈における-r 脱落の生起数

文脈	形態	-r 脱落数	非脱落数	文脈	形態	-r 脱落数	非脱落数
/d/	yordu	53	23	/m/	yormuşun	1	1
/d/	yorduk	15	14	/m/	yormuşum	2	2
/d/	yordum	43	15	/s/	yorsa	23	24
/d/	yordun	8	8	/s/	yorsam	5	5
/d/	yordunuz	3	1	/s/	yorsan	18	1
/d/	yordur	6	3	/s/	yorsanız	2	2
/l/	yorlar	225	88	/s/	yorsun	279	79
/l/	yorlardı	9	8	/s/	yorsunuz	91	23
/l/	yorlarmış	10	4	/u/	yorum	4	921
/m/	yor mu	2	1	/u/	yoruz	0	235
/m/	yormuş	32	11	語末	yor	1308	523

3.5. 性別・年齢と-r の脱落

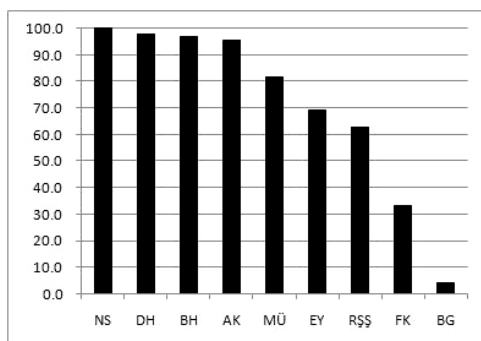


図 7. 女性における-r の脱落

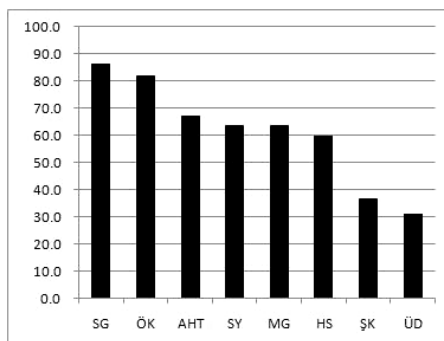


図 8. 男性における-r の脱落

性別が-r 脱落の要因になりうるのだろうか。図 7 と図 8 をみると女性の方が-r 脱落のスコアが高いことがわかる。4 名の女性、とくに AK, BH, DH, NS は 90%以上の確率で-r を脱落させていることがわかる。ただし統計的にみると、性別と-r の脱落の間の相関係数は $r = 0.19$ ($n = 17$) となり、有意な値ではない ($p = 0.47 > 0.05$)。

図 9 では、縦軸の棒グラフは-r の脱落率を表し、折れ線グラフはインフォーマントの年齢を表す。データは話し手の年齢順に並べられていて、一番年齢が高い FK が右に、一番若い NS が左になる。3 名の若いインフォーマント DH, BH, NS が、高い比率で-r を脱落させていることがわかる。とはいえ年齢と-r 脱落の間の相関係数は、 $r = -0.28$ ($n = 17$) と低く、有意値ではない ($p = 0.28 > 0.05$)。

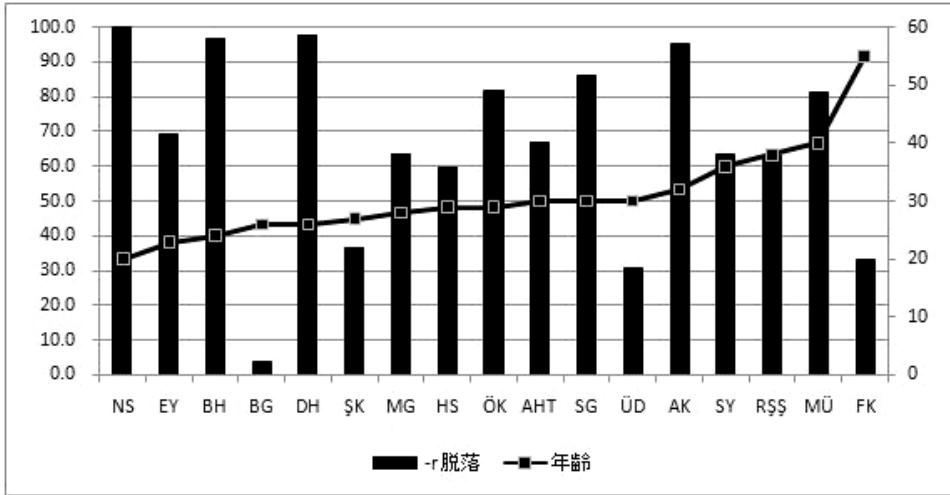


図9. 年齢と-rの脱落

4. -Iyor と bir の相関関係

上で、音声的な条件が-rの脱落に関与していることを見た。実際-rの脱落は、子音/d/, /l/, /m/, /s/の前と語末で起こりうる。それに対して、会話の速さ、内容、話し手の性別や年齢、文法的な文脈は、いずれも統計的にみて-rの脱落と関係がないことがわかった。ここではウズソイにより提示された-r脱落の2つのタイプ、現在形接尾辞-Iyor と単語 bir の間に相関関係があるかどうかを検討する。

4.1. -Iyor と bir の-r脱落における個人的変異

図10では、棒グラフが-Iyorにおける-r脱落率を表す。他方、折れ線グラフは単語 bir における-rの脱落を示す。データはBGからNSまで、-Iyorにおける-r脱落の比率を昇順に並べ替えている。平均値は-Iyorが69%で、birは62%である。グラフから分かるように、4名の話し手(BG, ŞK, SY, NS)は、-Iyorとbirとで異なる音声的行動をとる。すなわちBGはbirでより頻繁に-r音を脱落させるのに対して、ŞK, SY, NSでは、-rの脱落は-Iyorの方が頻繁である。彼らはイズミール、イスタンブール、シバス、ヨズガット出身であるため、出身地が-r音の保持の理由を説明するとは考えにくい。したがって、-rの脱落はこれらの話し手たちの個人的な性向のように思われる。実際、これら4名の話し手を除けば、-Iyorにおける-rの脱落はbirにおける脱落と強い相関関係にある。相関係数 $r = 0.85$ ($n = 13$) は1%の水準において有意である ($p = 0.00 < 0.01$)。つまり、一般的に言って、教養の高いトルコ人は-Iyorとbirの-rの脱落に関して、同じような音声的行動をとることが多いのである。

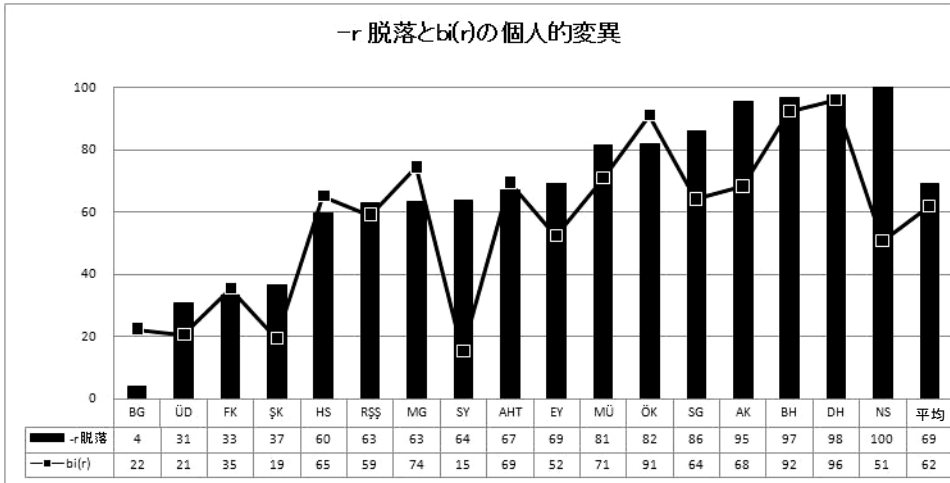


図 10. -lyor と bir における-r の脱落の個人的変異

-r の脱落は個人的な性向が誘因となって引き起こされることがあるという我々の仮説は、何人かのインフォーマントにおいて、話者間の要因が-r の脱落に何らかの影響を与えていると考えられることから現実的な解釈のように思える。MSC Turkish では、17名のインフォーマントのうち5名が、2つの異なる対人的条件のもとで会話を行っている。一方の条件では、話し相手はほぼ同年代であり、どちらかと言えば気楽で安心した状況で会話することができたであろう。他方、もう一方の条件では、話し相手は10歳以上年上であり、いくらか緊張して話をしたであろうと思われる。この5名のインフォーマントは2つの状況下でそれぞれ異なる-r 脱落のタイプを示した。

-lyor と bir の-r の脱落に対して同じ音声行動をとるインフォーマントでは、上記の状況において-r の脱落にとくに変化は見られない。彼らは相手が自分と同じ年代であっても、10歳年上であっても、ほぼ同じ-r 脱落率を保持する。たとえば29歳のHSはD201とD204で38歳のRŞŞと会話し、D212では同じ歳のÖKが話し相手であるが、両者で-r の脱落率に大きな差は見られない。逆もまた真なりであり、RŞŞは年下のHSと話す場合でも、-r の脱落に大きな変化はない。表7参照。

表 7. 対人的要因：-r の脱落に変化がない場合

	-r 脱落	-r 非脱落	-r 脱落	-r 非脱落
	D201, D204		D212	
HS	66.0%	34.0%	57.3%	42.7%
	D213		D201, D203, D204, D205	
RŞŞ	54.8%	45.2%	57.1%	42.9%
	D209, D212		D203	
ÖK	72.5%	27.5%	65.3%	34.7%

上記のような-rの脱落に変化が見られない話し手に対して、変化の見られる場合がある。ÜDとŞKはともに-rの脱落率が低い話し手であるが、話し相手によって-rの脱落に大きな変化が起きる。30歳のÜDはD202で26歳のBGと会話するときは、ほとんど-rを脱落させないが、D205とD207でそれぞれ38歳と40歳の相手と話すときは、-r音を頻繁に脱落させている。27歳のŞKはD206、D210、D211で26歳と30歳の相手と話すとき、-rの脱落率は13.1%と非常に低い。ところがその脱落率は40歳の相手と話すとき、突然30%まで上昇する。表8を参照。我々のコーパスは圧倒的に小さいため、こうした複雑で微妙な-rの脱落現象を説明するために十分なデータであると言えないが、少なくとも-r脱落は個人的な要因と関連性があるのではないかと推論できる。

表 8. 对人的要因：-rの脱落に変化がある場合

	-r 脱落	-r 非脱落	-r 脱落	-r 非脱落
	D205, D207		D202	
ÜD	32.7%	67.3%	6.8%	93.2%
	D208		D206, D210, D211	
ŞK	30.1%	69.9%	13.1%	86.9%

4.2. birにおける-r脱落の要因

これまでと同じ手続きで単語 birにおける-r脱落を統計的に分析しておこう。表9から分かるように、トピック、性別、年齢の要因はいずれも-rの脱落に非関与的である。他方、会話のスピードは関連性がある。速さと-r脱落の間には弱い相関があり、 $r = 0.46$ ($n=27$) は5%の水準で有意と判定される ($p = 0.02 < 0.05$)。

表 9. birにおける-r脱落の要因

トピック	$r = -0.17$ ($n = 27$), $p = 0.41 > 0.05$	非有意
性別	$r = 0.16$ ($n = 17$), $p = 0.53 > 0.05$	非有意
年齢	$r = -0.21$ ($n = 17$), $p = 0.42 > 0.05$	非有意

5名のインフォーマントBG, FK, SY, ŞK, ÜDは、あまりbirの-rを脱落させないようである。図9を参照。音声文脈について言うと、特に4つの子音/s/, /d/, /k/, /y/⁵の前で-r脱落の頻度が高い。図11を参照。

⁵ /y/はトルコ語の文字表記で、音声学的には半母音[j]を表す。

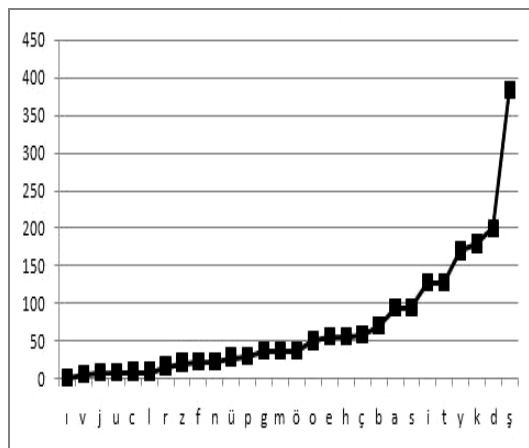


図 11. bir の生起する音声的文脈

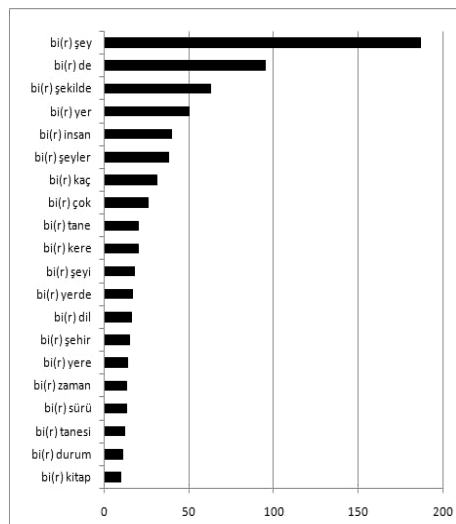


図 12. bir のコロケーション

しかしながら、図 12 を見てみると、-r がこうして高い頻度で脱落するのは、音声文脈によるのではなく、単語 *bir* のコロケーションが影響していることが分かる。*bir* はしばしば *bir şey*, *bir de*, *bir şekil*, *bir yer* として現れるのである。

結論

先行研究で既に指摘されているように、現在形接尾辞-Iyor の-r 脱落を分析するには、2 つの音声文脈を考慮する必要がある。語末の位置と子音の前の位置である。MSC Turkish を分析することで、本稿では-r の脱落が起こる音声文脈を、4 つの子音/d/, /l/, /m/, /s/の前という風に具体化することができた。また単語 *bir* の場合には、*bir şey*, *bir de*, *bir şekil*, *bir yer* と言ったコロケーションが-r の脱落に関係している。

-r の脱落が最も頻繁に起きるための要因とは一体どのようなものだろうか。本稿では、性別、年齢、出身地のような社会言語学的要因が関連しているかどうかを調査した。その結果、これらの要因はいずれも統計的に有意な関連性を持っていないことがわかった。会話のトピックや速さも分析したところ、会話のスピードは *bir* の場合に、-r の脱落と相関関係があることがわかった。

MSC Turkish の分析からは、-r の脱落が社会言語学的な要因と関連があるのではなく、個人的な動機付けから起きる現象であるように思える。実際、何人かのインフォーマントでは、-Iyor あるいは *bir* で-r の脱落を避けようとする傾向がある。ところが他のインフォーマントは、性別や年齢といった社会言語学的な相違を示すことなく、-Iyor と *bir* のいずれにおいても同じ-r 脱落の傾向を示す。興味深いことに、Dufter and Stark (2007)はフランス語の否定の *ne* が脱落する現象に関して、脱落は話し手の年齢、性別、社会的地位とは無関係

であると述べている⁶。もちろんこうした言語現象が個人的な動機付けによるものだと主張したとしても、それが直ちに現象の探求に一定の具体的成果をもたらしたとは到底言えない。言語現象について我々が知る知識の範囲では、個人的に動機づけられた事柄については、ほとんど何も判っていないのが現状だからである。また本稿で分析の対象となった MSC Turkish は小さな言語資料であり、複雑なトルコ共和国の言語社会を代表しているわけでもない。この分析をもってトルコ語の-r 脱落を一般的に議論することはできない。さらに同種のコーパスに基づく言語分析が繰り返し行われる必要があることは言うまでもない。

参考文献

川口裕司(2005)「現代トルコ語の音体系—分節音に関する批判的レビュー—」,『語学研究所論集 10』,東京外国語大学語学研究所, 35-62.

Aksan, D. (ed). (1978) *Türkiye Türkçesi Gelişmeli Sesbilimi*. Ankara: Türk Dil Kurumu Yayınları.

Delais-Roussarie, É. and J. Durand (eds). (2003) *Corpus et variation en phonologie du français*. Toulouse: Presses Universitaires du Mirail.

Demircan, Ö. (2001) *Türkçenin ses dizimi*. İstanbul: Der Yayınları.

Dufter, A. and E. Stark. (2007) “La linguistique variationnelle et les changements linguistiques ‘mal compris’: le cas du *ne* de négation”. *Études sur le changement linguistique en français*, B. Combettes and Ch. Marchello-Nizia (eds). Nancy: Presses Universitaires de Nancy. 115–128.

Gibbon, D., R. Moore and R. Winski (eds). (1998) *Handbook of Standards and Resources for Spoken Language Systems* Vol.1–4. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.

Göksel, A. and C. Kerslake. (2005) *Turkish: A comprehensive grammar*. London: Routledge.

Kawaguchi, Y. (2006) “Usage-Based Approach to Linguistic Variation – Evidence from French and Turkish”. *Spoken Language Corpus and Linguistic Informatics*, Y. Kawaguchi, S Zaima and T. Takagaki (eds). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. 247–267.

Kornfilt, J. (1997) *Turkish*. London: Routledge.

Morel, M.-A. et L. Danon-Boileau. (1998) *Grammaire de l’intonation. L’exemple du français*. Paris: Ophrys.

Özsoy, A. S. (1999) *Türkçe Turkish*. İstanbul: Boğaziçi Üniversitesi Yayınları.

Özsoy, A. S. (2004) *Türkçenin yapısı – I*. İstanbul: Boğaziçi Üniversitesi Yayınları.

Sarıca, M. (2005) *Yeni dilbilim kuramlar ışığında Sözlü Dil Yapısı*. İstanbul: Multilingual.

Selen, N. (1979) *Söyleyiş sesbilimi akustik sesbilim ve Türkiye Türkçesi*. Ankara: Türk Dil Kurumu Yayınları.

Yılmaz, S. (2006) “Présentation d’un corpus oral en turc contemporain”. *Aspects of Corpus Linguistics*

⁶ Dufter and Stark (2007) p.116.

– *Spoken Language Corpora and Written Language Corpora*-, Working Papers of Linguistic Informatics, 12. Tsuruga & al. (eds), 21st Century COE “Usage-Based Linguistic Informatics,” Graduate School of Tokyo University of Foreign Studies, 201–240.

AntConc 3.2.1w (Windows). Laurence Anthony. Faculty of Science and Engineering Waseda University, Japan; anthony@waseda.jp.